

秩序としての 混沌

インド研究ノート

第16回

映画から見える インド (三)

湊 一樹

●国民的娯楽としての映画

歴史家のラーマチャンドラ・グハは、独立後のインド政治史を扱った九〇〇ページにも及ぶ大著の最終章を、インドの国民的娯楽を描き出すことにあてている。

「インド人の娯楽」と題されたこの章で特に目を引くのが、映画についての記述が大半を占めていることである。

その冒頭でグハは、インドで最も人気のある娯楽は何といっても映画館に行つて映画を観ることであり、映画はカースト、階級、宗教、性別、言語といった社会的な亀裂を飛び越えて、多くのインド人を虜にしてきたと述べている(参考文献①、七二〇ページ)。そして、映画によってインドという多様な国に文化的な統合がもたらされたという議論を念頭に置きながら、次のような印象的な一文でこの本全体を結んでいる。

「憲法が原形をとどめないほど改正されることがない限り、選挙が定期的に公正な形で行われ、世俗主義の精神が行き渡っている限り、人々が自ら選んだ言語で話したり書いたりすることができる限り、市場経済がうまく結びつき、ある程度有能な

公務員と軍人がいる限り、そして、忘れてはいけない、人々がヒンディー映画を観て、そこで流れる歌を口ずさむ限り、インドは生き続けるであろう」(参考文献①、七七一ページ)。

今後、インドの文化的な統合に映画がどれだけの役割を果たしていくのかは定かではないが、インドで最も人気のある国民的娯楽が(そのなかで歌われる曲も含めて)映画であるという点に疑問を差し挟む余地はないだろう。例えば、今から四〇年ほど前のビハール州ガヤの「場末の映画館」での光景を描いた以下の一節は、映画に夢中になっている人たちが生み出す熱気を生き生きと伝えている。

「切符売場の周りにはすでに人垣ができています。覗き込むと、男たちが切符売場の小さな窓口で金を握って手を突っ込んでいます。安くていい席を取るためらしい。窓口といってもガラスに小さな穴があいているだけのものだ。五人も入れると身動きがとれなくなる。そこにさらに手が差し込まれる。無数の手、手、手。結局その夜は一五分前に切符が売られはじめた」

(参考文献②、一一一ページ)。

インドで映画が絶大な人気を誇ってきたのには、いくつかの理由がある。まず、単に映画に代わる娯楽があまりなかったという点がすぐに思いつく。例えば、私たちがとって最も身近な暇つぶしの種であるテレビは、インドでは現在でもなお幅広く普及しているとは言いがたい状況にある(それ以前の問題として、電力供給が非常に不安定なため、停電が頻繁に起こる)。具体的には、二〇〇七年から二〇〇八年にかけてインド全土で行われたサンプル調査によると、テレビを所有しているのは調査世帯全体の約四六% (農村部では三二%、都市部では七四%) にすぎなかった(参考文献③、二二ページ)。さらに一〇年前、二〇年前、三〇年前となれば、一般家庭でのテレビの普及率がさらに低かったことはいまでもない。

●現実逃避のための映画

人々が映画に魅了され続けてきた理由を考えるうえでもうひとつ重要なのは、映画が貴重な娯楽であるというだけでなく、厳しい現実を忘れさせてくれるという点にある。非常に興味深いことに、イ

インドに関して書かれた本を読んでいると、映画について触れた部分でこのような指摘をよく目にする。その一例として、我先にチケツトを買って求める人たちの様子を描いた前記の引用に続く場面を見てもみよう。

「ボビー（引用者注：映画の登場人物）はミニ・スカート姿も艶やかに、はつらつと動き廻る。インドでは滅多に見られない姿だったので、私もインドの男たちと共にその太腿を凝視してしまった。しかし、考えてみれば、ミニ・スカートばかりでなく、この映画に出てくるようなものは、ここで見ている人々には無縁なものばかりだった。豪壮な家と調度、プールつきの庭、すばらしいパーティー、大金持ちの御曹司と美しい娘、素敵な恋、海、山、雪、花。いたいこのガヤのどこにそんなものがあるのか見当もつかない。いや、だからこそ、彼らはこのように熱い眼差しで見ているのだらう。多分、この中にあるのは彼らの夢そのものなのだ。彼らはサタジット・レイの映画など見たくもないに違いない。五〇パイサ（引用者注：お

金の単位で、一ルピーは一〇〇パイサ）もの金を払って、どうして自分たちの現実を眺めなければならぬ理由がある。夢を見させてほしいのだ……」（参考文献②、一一一〜一二ページ）。

また、同様の考え方は映画を作る側にもみられる。ポリウッド映画はインドの現実を映し出していないのではないかとイギリス人ジャーナリストの質問に対して、「おそらくすべての時代を通して最も人気のある映画スター」（参考文献①、七二六ページ）であるアミターブ・バッチャンは、「そりゃそうだよ。ポリウッド映画は現実逃避のための映画っていわれてるくらいだからね。自分の身の回りで毎日のように貧困を目の当たりにしているのに、貧困を描いている映画をわざわざ金を払ってまで観に来る客がいると思ukai」と実に明快に答えている（参考文献④、三二八ページ）。

すでに述べたように、前者の例は今から四〇年ほど前の情景を描いたものであるが、後者の例は今から八年前に交わされたやり取りに基づいている。映画に夢中になることで、人々は厳しい現実をほんの一時でも忘れることができ

るという見方は、遠い過去の話などではなく、現在にもそのままではまるといえるだろう。

●銀幕は遠くなりけり

その一方で、映画を取り巻く状況は時代とともに大きく変わり、これまでになかった新たな問題が生まれている。都市部を中心に、最近まで主流であった単館映画館（single-screen theatre）が次々と姿を消し、最新式の設備を備えたシネマ・コンプレックス（multiplex）がそれにとって代わりつつあるのは、とりわけ顕著な変化である。なぜこの点が問題なのかというと、一部の映画関係者も認めているように、シネマ・コンプレックス（以下、シネコン）の入場料は比較的高く設定されているため、貧困層はもろろんのこと、ある程度の所得レベルの人たちでさえも、気軽に映画を観に行くことが難しくなっているからである（参考文献⑤）。

例えば、インドの二七都市で四のシネコンを運営しているある有力チェーンの場合、曜日と時間帯、映画館の場所、席のクラスなどの条件にもよるが、二〇〇〜三〇〇ルピー（一ルピーは約一・六円）という入場料がごく普通にみ

られる（参考文献⑥）。（みなと かずき／アジア経済研究所 在アリー海外派遣員）

《参考文献》

- ① Guha, Ramachandra 2007. *India after Gandhi: The History of the World's Largest Democracy*. London: Macmillan（佐藤宏訳「二〇一三」『インド現代史上・下』明石書店）。
- ② 沢木耕太郎「一九九四」『深夜特急』インド・ネパール』新潮文庫。
- ③ International Institute for Population Sciences 2010. *District Level Household and Family Survey 2007-08*. India. (<https://nrhm-mis.nic.in/ui/reports/dlhisii/INDIAREPORTDLHS3.pdf>)
- ④ Luce, Edward 2006. *In Spite of the Gods: The Rise of Modern India*. New York: Anchor Book（田口未和訳「二〇〇八」『インド 厄介な経済大国』日経BP社）。
- ⑤ *Multiplex Killed the Single-Screen Cinema-Goer." *Wall Street Journal*, June 4, 2010.
- ⑥ Website of PVR Cinemas. (<http://www.pvrcinemas.com/>)